

書評

「天文学者はロマンティストか？」

～知られざるその仕事と素顔～

縣 秀彦 著（NHK 出版生活人新書、定価 700 円）

「お仕事は何ですか？、ご専門は？」、「はい、天文学です」、「ロマンティストですねえ」……。天文教育の読者なら、一度や二度はこんな会話の経験がおありの方も多いはず。こちらからの「そんなことないですよ」の返答の次には、決まって「望遠鏡で天体を覗いている仕事なんですよ！」の言葉が……。

さて、この本は、著者である縣さんのこれまでの人生をベースに、天文学研究の歴史、天文教育普及の動向、最先端の天文学に携わる人々の生き方が醸し出す多チャンネルな科学追求への道、などについて述べられており、天文教育普及に関心の高い方々なら、必読書の1冊に違いない。

まさに本書をとおして、天文学の魅力、天文研究の魅力、そして宇宙を知る魅力、宇宙を伝える魅力について語り、「そんなことないですよ」に続く言葉の材料をふんだんに用意してくれているのだ。

具体的な内容について紹介しよう。第1章では、みんなの夢を自分の夢として実現してきた4人の天文学者を紹介しながら、天文学者の人となりを紹介している。第2章では、古代文明時代の天文学から始まり、大望遠鏡時代を迎えた現代天文学までをつぶさに解説。その内容は、天文学史の教科書としても使えるほど完成度の高いものとなっている。第3、4章では、天文学は役に立つかという大きな課題を掲げたなか、天文学の歴史のなかでの実益について触れるとともに、近年注目を浴びる天文学のテーマについて述べ、それに続く第5章では、著者の教育学博士としての研究成果から、天文学と文化、あるいは社会や教育との関わりについて考察し、宇宙を知ることの意義について言及している。第6章で

は、天文学分野での活躍の場を紹介し、第7章では、みんなの科学としての天文学の価値についてまとめている。

私が、初めて縣さんに会ったのは、1981年4月のこと、母校である東京学芸大学の入学式。当時は18歳であったので、すでに28年の付き合いである。共に天文学研究を目指し、競争を重ねてきた。二人とも1年生の時から東京天文台（現国立天文台）に通い、2006年末に逝去された磯部琇三氏のもとで勉強した。1人前の論文を書くのはどちらが先か、学会で発表するのはどちらが先か、新聞掲載は？ テレビ出演は？ 本の執筆は？ 他にもいろいろ……。しかし結果は言わずもがな、根性も能力もない私が勝てるわけもなく、そのほとんどが縣さんの勝利だった。現在、国立天文台の准教授としてご活躍の縣さん、もし恩師が天上から今の姿を見ていると仮定すれば（恩師の遺言なので、“仮定”とした）、彼の天文学研究並びに天文教育の功績を、心の奥底ではきっと喜んでいるに違いない。

本書の出版にあたり、ただただ残念（?!）なのは、著者本人が、人生半ば（縣さんの年齢は、地球年齢の1億分の1）にして、自分の生きざまを語ってしまったこと。読み終えての第一印象は、「この本を書くのは早すぎた」だった。ここは、縣さんには、もうひと頑張りふた頑張りしていただき、これまで以上に社会を励起され、46年後には今回よりもぶ厚い第2巻を出していただきたいと思うのは私だけだろうか。この書評は、縣さんにとっては、付き合いは長くとも頼りにならない親友からの応援歌とご理解いただければ幸いである。

高橋 淳（茨城県立水海道第一高等学校）